

〔論文〕

# 保育の場における身体表現に関する研究動向

—リトミック活動を通して—

中 根 佳 江  
Yoshie Nakane

瀧 川 光 治  
Koji Takigawa

大阪総合保育大学  
児童保育学部 非常勤講師

大阪総合保育大学  
児童保育学部

本研究では、乳幼児の集団を対象とした保育の場におけるリトミック活動を通して、身体表現に関する実践的な研究を概観し、音楽を通じた表現活動における乳幼児の表現・保育者の表現、そして両者の表現の関する知見の整理を試みた。その結果、保育者の表現は乳幼児の表現に影響を及ぼすことが明らかになった。

0～2歳児は特に保育者の模倣から始まり、年齢が上がるにつれて表現を楽しむようになってくる。その時期の保育者の身体表現は、0～2歳児の子どもの表現力がどのように芽を出していくか、また保育者の表現の幅は3歳児以上の子どもの表現を左右するとされている。保育者はリトミックの研修を通して、保育者は表現することを楽しみ、また様々なことに気が付くことが多い。保育者自身の表現が、子どもへの表現に影響していると保育者自身が気づくこともその1つである。保育者はロールモデルとなるような表現をすることの重要性が明らかになった。

キーワード：リトミック・乳幼児・保育者・身体表現

## 1、はじめに

本研究は、保育の場における身体表現に関する研究動向、その中でもリトミック活動の実践についての子どもの取り巻く環境や保育現場の環境の変化も考え、過去10年間の研究動向を整理し、現在の知見を見出すことを目的としたものである。日本においてリトミックは古くは1930年頃には紹介されており、1945年の第二次世界大戦終戦以降もどの時代においても実践され研究論文等としてまとめられている。本研究ではとくに近年の動向を検討するために、過去10年間に限定した。

リトミックに限らず、幼稚園、保育所、認定こども園において、音楽を通じた表現活動や身体表現は日々の保育において多く行われている。その中で歌唱活動や楽器遊びは保育現場では多くの場合、毎日・毎年行事などサイクルの中で実施されている。文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』の領域「表現」のねらいの部分に「幼児は音楽を聴いたり、絵本を見たり、つくったり、かいたり、歌ったり、音楽や言葉などに合わせて身体を動かしたり、何かになったつもりになったりなどして、楽しんだりする。これらの表現する活動の中で、幼児は内面に蓄えられた様々な事象や情景を思い浮かべ、それらを新しく組み立てながら、想像の世界を楽しんでいる」とあるように、保育現場の中で子どもたちは毎日のように音楽に触れて生活しているが、その中で音楽などに合わせて身体を動かすような表現する活動を通し

て、想像の世界を楽しむ子どもの姿があることを指摘している。リズムを取得することをメインにしたリズム遊びや身体能力を伸ばすことをメインとした運動遊びなどにみられる「からだを動かす活動」とは違い、リトミック活動はイメージした物や想像した物を自由に身体で表現し、表現することを通して人格形成に影響を与え、感性を磨く「音楽などに合わせて身体を動かすような表現する活動」の1つである。

リトミックの創始者である、エミール・ジャック＝ダルクローズ（Emile・Jaques＝Dalcroze：1865～1950）の考えについて、クレル＝リズ・デュトワ＝カルリエは次のように述べている。リトミックによる「想像力の訓練、感受性（その形態の1つが音楽性であるが）の教育、個性の喚起は、創造へと連なる道にうちたてられる道標となるものである。」と述べている<sup>1)</sup>。そのことを中村（2018）は、「リトミック活動を通して、想像力や感性を高め、想像力を養う」と端的に述べている。さらに、中村は幼稚園教育要領の領域「表現」とのつながりを検討しており、領域「表現」の「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と一致すると述べ、その内容の「（4）感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現したり、自由に書いたり、つくったりなどする」にも当てはまるとも述べている<sup>2)</sup>。これらのことを踏まえて、器楽合奏や歌唱活動の表現活動をする以前に、生活の中で身近な自然や素材を意識的に保

育に取り入れ、それらの音をよく聞いたり、その音を再現したり、その音を身体で表現することで感性を高めていくことが求められていると結論付けている<sup>3)</sup>。

以上のことから、幼児教育ではリトミック活動が重要な育ちの機会と位置付けられていることが確認された。しかし、リトミックを通して乳幼児にどのような身体表現力が育つか、保育者の表現や両者の表現に関して影響があるかを十分に明示されていない。そこで、本研究ではリトミックに注目し、保育の場における身体表現に関する研究動向を整理するものである。

それによって、音楽を通じた表現活動における乳幼児の表現・保育者の表現、そして両者の表現に関する知見の整理を試みる。

## Ⅱ 保育の場におけるリトミック活動を通して、身体表現に関する保育実践の概観

### 1 文献検索の基準と検索方法

文献検索の基準は（１）日本の保育の場における乳幼児を対象としたリトミック活動に関する物、（２）幼稚園・保育所・認定こども園のいずれかにおける集団保育の中のリトミック活動の実践について言及されているものとした。本研究の目的にあった文献収集を行うに際し、CiNii 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ（以下「CiNii」）の電子ジャーナルデータベースを使用した。年代は2010年～2020年（過去10年間）に限定し、「リトミック」、「乳幼児」、「保育者」、「身体表現」、「表現」をキーワードとして検索を行い、その中から幼稚園、保育所、認定こども園における集団を対象としたリトミックに関する研究を主に選出し、分析対象とする調査を行った。

### 2 結果および考察

キーワードを「リトミック×乳幼児」で4件抽出されたが、これらは保育現場の実践ではなく本研究に関係ないので除外する。次いで、「リトミック×保育者」とすると46件抽出されたが、保育者養成校での実践や保育現場での研修も含まれ、結果的に対象とする文献は5件に絞り込まれた。次いで、「リトミック×身体表現」として同様に絞り込むと15件中2件となった。しかしながらそのうち1件は「リトミック×保育者」と「リトミック×身体表現」で共通して抽出されたものであった。次いで「リトミック×表現」として同様に絞り込むと82件中3件に絞り込まれた。しかしながらそのうち3件は「リトミック×保育者」と「リトミック×表現」で共通に抽出されたものだった。

そのため、結果的に幼稚園、保育所、認定こども園における集団を対象としたリトミックに関する研究として抽出された論文数は6件と少ないがこれらを分析の対象とした。また、分析にあたって、本研究ではリトミック活動の指導法について整理するのではなく、保育の場における身体表現の視点から整理を行うので、リトミック活動の中で見られる「乳幼児の表現」「保育者の表現」「両者の表現」の3つに区分し検討を試みる。

#### （１）リトミック活動の中で見られる乳幼児の表現に関する研究

領域「表現」の活動とリトミックとの関連や意義を明らかにするため、森（2017）は専任の講師がリトミックの時間を担当している幼稚園に勤務している先生にアンケート調査を行い、表現活動として「リトミック」の中で育まれたと思われるものを問い分析を行っている。その結果、音楽に親しみ、よく聴き、身体を動かし表現するリトミックが、幼稚園教育要領の領域「表現」の「感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現する」「音楽に親しむ」「自分のイメージを動きや言葉で表現する」といった内容を具現化するのに、適していると考えられることを指摘している<sup>4)</sup>。

このように表現活動として「リトミック」が領域「表現」の「音や動きで表現する」「自分のイメージを動きや言葉で表現する」を具体化するのに適していると指摘されているが、その際の音楽的な表現力に着目して研究している中根（2015）は、リトミックを通して保育者が子どもの音楽的表現力を観察した際、0～2歳は音楽に対する身体的な反応とイメージしたものを模倣する活動を観察の観点とした。7か月の観察であったが、リトミックの活動の継続によって、約75%の子どもの成長が認められた。7ヶ月間の観察では、子どもの日々の生活において、気持ちのむらが大きく、音楽的表現力の成長が認められず低下した子どももいた。また低年齢児は身体的発達が著しい。その身体的発達による行動の範囲が広がることにより、自由に身体を動かすことができるようになり、また細かな動きもできるようになることから音への反応が大きくなるので、音楽的表現力に対して、身体的発達の影響が大きいことを指摘している<sup>5)</sup>。

リトミックの実践と学びの関係を明らかにした小竹・馬場・高橋・渡邊・高橋（敏）（2020）は、保育施設で行われるリトミックの実践から1、2、3歳の子どもが何を学び、何が育っているかを調査した。1歳・2歳・3歳それぞれ学級担任以外の一人の保育者が一貫して、年齢ごとにリトミック活動の指導を行った。そのリトミックの活動時間に保育者と子どもの姿や発言を観察・記

録し、後日保育者とカンファレンスを行い、子どもの育ちや保育者が考える子どもの育ってほしい姿、リトミック活動中に保育者が意図していたことを議論した。1歳児は自ら感じたままに動くという段階ではなく、保育者の模倣を行うことで、徐々に自分なりに表現することを身につけてゆくと推察された。また1歳児の子どもが見たことがある身近なものとして動物などが表現しやすく発達過程にあっていると考えられた。2歳児は音楽と保育者の言葉がけ、そして保育者の動きから、身体で表現していた。3歳児は保育者が様々な動きをしているのを見て、自分の好きな動きを繰り返し表現していた。2歳児より表現するものになり切っている様子が子どもの表情から読み取れた。低年齢児の子どもにとって、音楽表現と身体表現の親和性が高いことは、生活の中で音楽を聴きながら体を揺らしたり歌いながら踊ったりなどの姿が多くみられることから、明らかである。そのため保育内容として発達上無理なく取り入れやすい活動であると同時に、始めは模倣から始められる保育者や友達と一緒に楽しめる活動の1つであることを指摘している<sup>6)</sup>。

子どもの発達の違いによるリトミック活動時の違いを明らかにした中根（2016）は認定こども園にて0～5歳児のリトミック活動時に、01. 2. 3. 4. 5歳児の動物を身体表現で表す活動を録画し、その分析を行った。01歳は、まだ動物の動きのイメージすることができない子どもや、自分の思うようにまだ体をコントロールできない子どもが多いので、自分でイメージをして動物の身体

表現を行うことができなかった。しかし、何かを感じ身体表現しようとする子どもは、保育者の動きの模倣を行っている。これはリトミック活動時保育者が動きを止めると、子どもたちも動かなくなったので、保育者の動きの模倣を起こっていることが明らかになった。2歳児は動物を少しイメージ出来るようになって、保育者の身体表現を模倣しながら、身体表現を行える結果となった。3歳児も、保育者の様々な身体表現を見て、子どもも保育者の身体表現を模倣しつつ身体表現を楽しむことはできているが、自らのイメージでは身体表現できることはなかった。4歳児になると、子ども自身が身体表現することを自由に楽しみ、自ら動物の動きを考えて表現しようとする子どもが出てきた。そして5歳児では、体のバランスもとれ、安定した身体表現の幅が広がって、音楽に合わせて動物の動きを自由に表現し、自らのイメージで表現をした動きを友達にも伝えようとする姿が見られる結果が示された<sup>7)</sup>。

このように、子どもがそれぞれの発達段階に応じて身体表現をするようになることを示している。小竹・馬場・高橋・渡邊・高橋（敏）（2020）では1歳・2歳・3歳の子どもの研究になっているが、中根（2015）や中根（2016）では、低年齢0～2歳児のリトミック活動の経験は、3歳児以上の子どもリトミック活動の表現力に影響を与えているということも言っている。ここで得られた各年代における身体表現を整理すると下記の表1のように整理できる。

表1 リトミック活動の中で見られる各年代における身体表現

	リトミック活動の中で見られる発達の特徴
0歳児	保育者の動きの模倣を行う
1歳児	保育者の動きの模倣を行う 自ら感じたままに動くという段階ではなく、保育者の模倣を行うことで、徐々に自分なりに表現することを身につけてゆく
2歳児	動物のイメージを少し出来るようになっていて、保育者の模倣をしながら表現を行える 音楽と保育者の言葉がけ、そして保育者の動きから、身体で表現する
3歳児	保育者の様々な表現を見て、子どもも保育者の表現を模倣しつつ身体表現を楽しんでいるが、自らのイメージでは表現することは難しい 保育者が様々な動きをしているのを見て、自分の好きな動きを繰り返し表現する
4歳児	自由に表現を楽しみ、自ら動きを考えて表現しようとする
5歳児	安定した表現の幅が広がって、音楽に合わせて自由に表現し、自らのイメージで表現をした動きを友達にも伝えようとする姿が見られる



このように乳幼児期は、「音楽的表現力に対して、身体的発達の影響が大きい」が、模倣する行為を土台に、イメージする力が育ってくることによって、3歳児くらいから自分なりの動きが生まれ、4歳児になると自分で動きを考えながら表現する力が育ってくることが示唆される。そのような3歳児以降の育ちの中で領域「表現」の「感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現する」「音楽に親しむ」「自分のイメージを動きや言葉で表現する」という内容を経験していくことが可能となることが示唆される。

## (2) リトミック活動の中で見られる保育者の表現に関する研究

領域「表現」の活動のなかで保育者の表現についての意義を明らかにするため、森（2017）はリトミックを中心に考察した研究の中でまとめとして、表現という領域は数字で測れない分、先生の持つ技術や発想力、感性による影響も大きいと述べている。調査結果として、リトミック活動を先生が幼児と一緒に活動に参加しているからこそ感じ取れたことだと指摘している<sup>8)</sup>。

領域「表現」の活動の中で、子どもと一緒に表現し、保育者の持つ技術や発想力、感性による影響も大きく指摘されるが、その保育者の発想力、感性など表現力などに着目して研究している中根（2016）（前述の文献）は保育者の表現力が子どもの表現力にもたらす影響について検討している。リトミック活動の中で、動物の身体表現を行い、録画観察を行った。その際、保育者は子どもと一緒に活動し、保育者同士は同じ動きをしないこととした。その際戸惑いを感じながらすぐ表現できる保育者がいたが、調査の意図を理解し、さまざまな表現をするようになった。この調査を通して「保育者自身の表現が子どもの表現力を高めることに影響していること」を指摘している。それを踏まえて、保育者は、どのような表現の場であっても、生き生きと表現することが重要であることを指摘している<sup>9)</sup>。

保育者が自らの表現が子どもの身体表現に影響することを知り、子どもに対して自らの身体表現の重要性に気づくことが大切であることを指摘している中根（2015）（前述の文献）は保育者の表現力の変容が及ぼす子どもの音楽的表現力への影響について検討している。実証的研究として、保育者のリトミックの園内研修を行い、自己評価を行った。その自由記述の分析により、保育者の気づきの中に、表現をすることについて楽しいと思い、保育者としてどのように表現すると、子どもたちの表現が豊かになるのかということを考えている保育者や、子どもが保育者の動きをよく見ていることに気づいたとい

う保育者もいたことが分かった。保育者として自らの表現の重要性と、保育者の表現力が子どもに影響を与えることを自覚的に再確認することが大切ということを指摘している<sup>10)</sup>。

保育者として自らの表現の重要性に気づくことが大切と指摘されている中、保育者自身の表現する時の心情について研究した伊藤（2012）は保育者に必要とされる音楽表現力の育成に関する研究において、保育者へのリトミック技能研修後に、アンケート調査を行った。保育者として必要な音楽表現力を問うと、「音楽に対する心情・感性」のカテゴリーに関連する意見が多々記述されていたが、ほとんどが「保育者自らが音楽を楽しみ、その様子が子どもに伝わっていく」という内容の物であったことを指摘している。保育者自身が積極的に音楽に関わり音楽を楽しみながら歌ったり演奏したり、身体全体で表現したり創作活動に親しむ様子は、子どもたちにとって表現活動のロールモデルになることへの再認識になった。また次に「子どもたちと音楽活動をしていて喜びを感じる瞬間はどんなときか」という設問で、「子どもとの“表現の交わり合い”が生まれたとき、保育者としての非常な充足感を感じていること」が多かったということなどから、保育者は確かな音楽表現力をもって子供が本来的に持っている性質、すなわち音楽を聴いたり表現して楽しむことのできる生来の才能に対して、積極的に働きかけていく使命があるのではないかと指摘している<sup>11)</sup>。

以上のことから、「保育者自身の表現が子どもの表現力を高めることに影響」し、「保育者自らが音楽を楽しみ、その様子が子どもに伝わっていく」ので、保育者は「子どもたちにとって表現活動のロールモデルになる」ことや「保育者として自らの表現の重要性と、保育者の表現力が子どもに影響を与える」ことを自覚することが重要であることが示唆される。さらに、「表現という領域は数字で測れない分、先生の持つ技術や発想力、感性による影響も大きい」だけに、保育者は「どのような表現の場であっても、生き生きと表現することが重要」であり、表現することを保育者が楽しみながらすることも大切とし、子どもにとって、表現活動のロールモデルになることが大切であることの指摘がなされていることが見出された。

## (3) リトミック活動の中で見られる乳幼児・保育者の両者の表現に関する研究

保育者の表現力の変容と乳幼児の音楽的表現への影響を明らかにした中根（2015）（前述の文献）は、保育者の表現力の変容が及ぼす子どもの音楽的表現力への影響

を調査した。リトミック活動を通して、保育者の音楽的表現力と子どもの音楽的表現力の関連を分析したが保育者の表現が豊かになると子どもの音楽的表現力の成長が高まることを指摘している。特に0～2歳児は保育者の姿・行動は影響を与える要因の一つとして考えられ、保育者がこの時期に表現しようとする姿勢がないと子どもはその環境になれ、保育者の表現力を低いまま感じ取り、模倣していることが分った。またリトミックの園内研修を通して保育者の表現力の変容に伴い、子どもの表現力が変わったとも示している。保育者の表現の中にも含まれる表情も豊かになってきたことによって、子どもの表現力にも影響があったと指摘している<sup>12)</sup>。

保育者の表現力が子どもの表現力に影響があったと指摘されているが、その際1・2・3歳児に注目して研究している小竹・馬場・高橋・渡邊・高橋（敏）（2020）（前述の文献）によると、次のように指摘している。1歳児は保育者の模倣から子どもたちは始まっている。動かない子どもはどう動いていいのかわからないのではなく、保育者の動きをよく観察し、子どもなりに学習し記憶するために動かなかったと保育者は推察していた。2歳児は、音楽と保育者の言葉がけ、そして保育者の動きから感じ取り、身体を動かしていた。保育者の模倣がほとんどであったが、模倣しながら自由に身体を動かし、表現することを楽しんでた。保育者が子どもの表現を認め、声掛けをすることや、画一的な表現を指導するのではなく、子どもが自由に想像し表現できるよう、保育者は配慮する必要がある。3歳児は、保育者の模倣は見られるものの、子ども同士で表現をしたり、自分なりに表現を楽しんだりする姿が見られた。継続的なリトミックの実践の結果である。また、3歳児は子どもの表現に合わせて、音楽を変えて、瞬時にアレンジして対応したとも示している。低年齢児のリトミックは、保育者自身が楽しみながら具体的な表現モデルを示すことが必要で、保育者は自分の表現力を子どもが模倣する自覚を持つことが重要であり、固定概念にとらわれない多様な表現力が求められていると言えるだろうと指摘している<sup>13)</sup>。

乳幼児と保育者の表現力の関係性を指摘している中根（2016）（前述の文献）によると、保育者の表現力が子どもの表現力にもたらす影響に着目し、リトミック活動の中の、動物の身体表現時の保育者と子どもの表現力の関連性を調査した。0～2歳児までは、自分でイメージをして表現するということは、動物のイメージがまだできない子どもも多く、保育者の表現を模倣して動くことが多いので、かなり保育者の表現力が子どもの表現力へ影響を与えるとわかる。また保育者がどのように表現する

かによって、0歳児から2歳児までにとっては、表現の芽をどのように出すかに関わってくると考えている。表現の芽を出し始めた3歳児も、保育者の表現の幅が3歳児以降の子どもの表現の幅を左右されるとも言っている。保育者が様々な表現をすることによって、子どもの表現の幅が広がり、また自ら表現を考えようとする姿、友達と表現を共有しようとする姿が見受けられたのは、保育者の表現力が子どもの表現力に影響を与え、子どもの表現力の幅を広げたと指摘している<sup>14)</sup>。

以上のことから、（2）で検討したこととも重なるが、以下のように整理できる。

<保育者が子どもへ与える影響>

- 乳幼児のリトミック活動では、保育者の表現を模倣して動くことが多いので、かなり保育者の表現力が子どもの表現力へ影響する
- 表現の芽を出し始めた3歳児も、保育者の表現の幅が3歳児以降の子どもの表現の幅を左右される
- 保育者の表現力の変容に伴い、子どもの表現力が変わる

<保育者の役割>

- 様々な表現をすることの重要性
  - ・低年齢児のリトミックは、保育者自身が楽しみながら具体的な表現モデルを示すことが必要で、保育者は自分の表現力を子どもが模倣する自覚を持つことが重要であり、固定概念にとらわれない多様な表現力が求められていると言える
  - ・保育者が様々な表現をすることによって、子どもの表現の幅が広がり、また自ら表現を考えようとする姿、友達と表現を共有しようとする
- 子どもの自由な表現を認めることの重要性
  - ・保育者が子どもの表現を認め、声掛けをすることや、画一的な表現を指導するのではなく、子どもが自由に想像し表現できるよう、保育者は配慮する必要がある

### Ⅲ まとめ

結果および考察の表1 リトミック活動の中で見られる発達の特徴の整理にあるように、リトミック活動の中で見られる発達の特徴は、どの研究においても発達段階に沿って子どもたちは表現を行うと言える。0～2歳児は、身体的発達などの要因もあり、自ら身体表現を行うことは少なく、保育者の模倣する行為を土台に、イメージする力が育ってくることによって、3歳児くらいから自分なりの動きが生まれ、4歳児になると自分で動きを考えながら表現する力が育ってくることが示唆される。そのような3歳児以降の育ちの中で領域「表現」の「感

じたこと、考えたことなどを音や動きで表現する」「音楽に親しむ」「自分のイメージを動きや言葉で表現する」という内容を経験していくことが可能となってくることが示唆される。これは0～2歳児においての保育者の模倣から始まり、継続することによって表現を楽しむようになり、自らイメージをして自由に表現するようになると言える。

また、リトミック活動においては、子どもの発達に応じて保育者自身の動きや表現の仕方を配慮する必要がある

が、先行研究の知見を整理すると、下記の図1のように、0～1歳児では「模倣しやすい動きや表現」を意識し、2歳頃から「保育者自身の生き生きとした表現の中で動き方・表現の仕方を広げる」ことを意識する。そして、子どもなりの表現の芽生えが生まれてくる3歳児以降では「様々な表現の仕方を引き出すように多様な表現を工夫する」ということを意識していくことが大切になると考えられる。

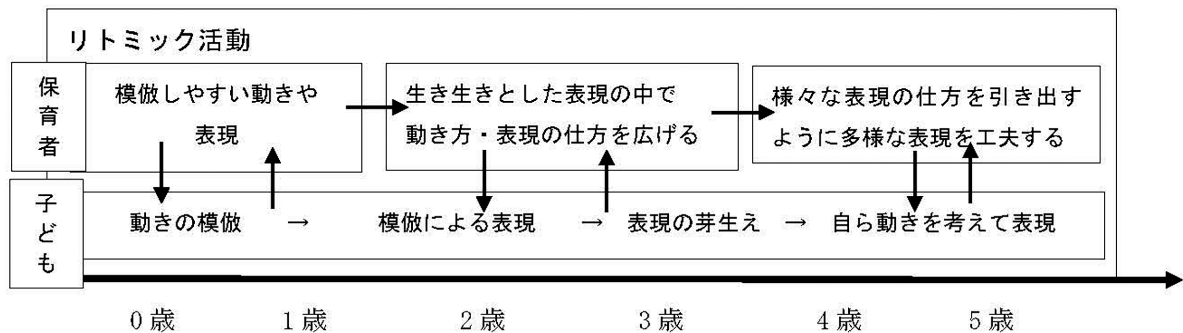


図1 リトミック活動における子どもと保育者の表現の関連性

図1で示すように、リトミック活動における子どもと保育者の表現の関連性があることが明確であると考えられる。そのことから中根（2016）は保育者の役割として、さまざまな表現をすることの重要性を保育者自身が認識し、まずは保育者自ら表現を楽しむことが大切である。また、保育者の表現は子どもに模倣されることを念頭において、固定概念にとらわれない多様な表現を行うことが子どもの表現力の幅を広げることにつながる。保育者はロールモデルとなるような表現をすることの重要性を認識することが大切であると考えられる。また、保育者自身の表現力のほかに、子どもの自由な表現を認め、画一的な表現を指導するのではなく、子どもの表現を受け入れることが保育者としての役割であると指摘している<sup>15)</sup>。保育者の表現力は、子どもの表現力に影響があり、身体の動きの幅が広がるなど、子どもの表現力が変わると考えられる。保育者が常に表現することを楽しみ、子どもに影響があることを認識し、子どもと共に表現を認め合うことが大切と考えられる。

今後の課題としては、集団を対象としたリトミックは、さまざま行われているが、研究対象になっていない現状がある。今後の課題として、集団を対象とした保育現場でのリトミックにおける身体表現の研究を増やすことや、年齢ごとの細かな子どもの身体表現について、また保育者と子どもの表現力の関連などの研究を充実していくことだと思える。

## 文献

- 1) フランク・マルタン他著（1977）. 作曲家・リトミック創始者 エミール・ジャック＝ダルクローズ 板野平訳 全音楽譜出版社, 393.
- 2) 中村礼香（2018）. 表現活動を通して育まれる資質・能力 鹿児島女子短期大学紀要 54, 70.
- 3) 中村礼香（2018）. 69-70.
- 4) 森 千恵子（2017）幼稚園教育要領の領域「表現」についての考察—リトミックを中心に— 淑徳大学短期大学部研究紀要, 57, 139-145.
- 5) 中根佳江（2015）. 保育者の表現力の変容が及ぼす子どもの音楽的表現力への影響—リトミックを通しての考察— 大阪総合保育大学紀要, 9, 95-97.
- 6) 小竹沙織、馬場訓子、高橋慧、渡邊祐三、高橋敏之（2020）. 子どもの主体的な身体表現を引き出すリトミックの保育実践研究（第一報）—保育施設における1・2・3歳児学級の事例を中心に— 岡山大学教師教育開発センター紀要, 10, 185-192.
- 7) 中根佳江（2016）. 保育者の表現力が子どもの表現力にもたらす影響—リトミックの模倣活動を通して— 大阪総合保育大学紀要, 10, 129-137.
- 8) 森 千恵子（2017）, 146.
- 9) 中根佳江（2016）, 129-137.
- 10) 中根佳江（2015）, 89-95.
- 11) 伊藤仁美（2012）. 保育者に必要とされる音楽表現力の育成に関する一考察（3） こども教育宝仙大学紀要, 3, 27-30.
- 12) 中根佳江（2015）, 98-101.
- 13) 小竹沙織、馬場訓子、高橋慧、渡邊祐三、高橋敏之（2020）, 185-192.
- 14) 中根佳江（2016）, 136-137.
- 15) 中根佳江（2016）, 137

## A Review of Research on Physical Expression in Nursery Schools : Through Eurhythmics Activities

Yoshie Nakane Koji Takigawa

*Osaka University of Comprehensive Children Education*

In this research, we outline a practical study on physical expression through Eurhythmics activities in a group-based childcare field, and relate expressions of infants and childcare person in expressional activities through music, and expressions of both. We tried to organize the findings. As a result, it was clarified that the expressions of the caregivers influenced the expressions of the infants.

0 to 2 year olds start to imitate childcare person and come to enjoy expressions. It is said that the physical expression of the childcare person at that time is how the expression power of the children of 0 to 2 years old buds, and the width of the expression of the childcare person influences the expression of the children of 3 years old and older. There is. Through the Eurhythmics training, childcare person often enjoy expressing themselves and become aware of various things. One of them is that the caregivers themselves find that their expressions affect their expressions for children. It became clear that it was important for childcare person to express themselves as role models.

**Key words** : eurhythmics, infants, childcare person, physical expressions

